

非定常ストークス方程式の解

東大 理学部 橋本 英典

§ 1. はじめに

ナビエ・ストークスの方程式の慣性項の $\partial V / \partial t + (V \cdot \nabla) V$ を $\partial V / \partial t$ で置きかえた非定常ストークス方程式は i) レイノルス数が小さい ($\rho \sigma L / \mu \ll 1$) とし、ばかちでなく ii) 流れの変動時間 $1/\alpha$ が通過時間 L/U にくさばて短かいとき ($\alpha L \gg U$) にも有効である。たゞし L は代表長、 U は代表流速、 ρ は流体の密度、 μ は粘性率である。また解の存在、唯一性の議論 等々にも重要な役割を演ずる。

ここでは方程式の線型性にもとづき、まず固定点にかかれた $F e^{\alpha t}$ の強さの集物源に対する基本解を導き、その重ね合わせによつて一般解を構成する。また非定常性にかかれた物体に依るかと、その物体によつていかにこぼれ場の遠くでいかにまっとうな間に簡単な関係がありことを示す。また強さが任意の時間変化をし、任意の

運動を行なう集中力源に対する解を合わせに、2
構成し、運動速度が一定値に近づくときそれがオセーソの
方程式の基本解（オセーソレット）を与えることを示す。

§ 2. 集中力 $F_p e^{\alpha t} \delta(x-x_p)$ に対する基本解¹⁾

点 x_p に集中力 $F_p e^{\alpha t} \delta(x-x_p)$ が働くときの基本解
は 同数 $e^{\alpha t}$ を除く

$$\nabla \cdot V = 0, \quad (1)$$

$$\rho \sigma V = \mu \Delta V - \nabla p + F_p \delta(x-x_p), \quad (2)$$

あるいは

$$\Delta_B[\mu V] \equiv (\Delta - k^2)[\mu V] = \nabla p - F_p \delta_p \quad (2')$$

を満足する。ただし $k^2 = \rho \sigma / \mu$ ($\text{Re } k > 0$), $\delta_p = \delta(x-x_p)$ (3)

(2) の div をとれば、(1) により

$$\Delta p = (F_p \cdot \nabla) \delta(x-x_p)$$

であるから、圧力 p は ラプラスの方程式の基本解

$$\phi_p = \begin{cases} -1/(4\pi r); \dots (3\text{-次元}), \\ \frac{1}{2\pi} \log r; \dots (2\text{-次元}), \end{cases} \quad r = |x-x_p|, \quad (4)$$

を用いて力の方向に軸をとって2次元を出し

$$p_p = (F_p \cdot \nabla) \phi_p \quad (5)$$

の形に表わすことができた。これを (2') に代入し、ヘルムホルツの方程式の基本解 ($\Delta_E[\chi_p] = \delta(x-x_p)$)

$$\chi_p = \begin{cases} -e^{-kz}/(4\pi z) & (3\text{-次元}), \\ -\frac{1}{2\pi} K_0(kz) & (2\text{-次元}), \end{cases} \quad (6)$$

(ただし K_0 は第2種の変形ベッセル函数) を用いれば
速度 V に対し

$$\begin{aligned} \mu V_p &= -\frac{1}{E^2} (F_p \cdot \nabla) \nabla (\phi_p - \chi_p) - F_p \chi_p \\ &= \frac{1}{E^2} [-\nabla p_p + \text{rot rot} (F \chi_p)] \quad (7) \end{aligned}$$

が得られる。

(7) の第1項は渦度 ($\nabla \phi_p$ は圧力に関係し、 $F_p \chi_p$ の項は

$$\mu \omega_p = \text{rot} (\mu V_p) = F_p \times \text{grad} \chi_p \quad (8)$$

が示すように渦度 ω_p とは之が、純非定常 ($k \neq 0$) であり限り遠く ($kz \rightarrow \infty$) 指数関数的に小さくなる。遠方場が渦度しでありことを示す。

任意の流れの中をかかれた物体による擾乱場は流体に F_p の力をかよほす基本解の重畳 (χ_p, F_p の種々の値に対して) により表わされることが (ストークス近似の成り立つ領域で) 遠方場を予之れば χ_p の重畳によるものは指数関数的に小さく (非定常境界層の外)、物体の中心を原点と

3) 2重巻き出しのポテンシャル場

$$\mathbf{V} = \nabla \left(-\frac{1}{\mu k^2} p \right), \quad p = (\mathbf{F} \cdot \nabla) \phi. \quad (9)$$

に近づく。ここに \mathbf{F} は \mathbf{F}_p の総和であり、2固定した物体に流体が及ぼす力 $-\mathbf{F}$ の反作用である。こゝから、静止 物体に働く力が2重巻き出しの形に与えられた圧力場（遷移速度場）の係数から与えられたことにみられたことは、この二つのフーリエ合成を行って、2重巻き出しの一般的な反作用であることが明らかである。

以上では物体が静止してゐるものとして、体積 V_0 の物体が $V_0 e^{at}$ の速度で運動するとき、物体に固定した加速座標系をとればよい。この $V_0 e^{at}$ の加速度を同じ一様反力場にかける浮力 $\rho V_0 e^{at}$ が物体に働く力にだけ加わることがわかる。

また e^{at} で分離した一般解は (15), (17) の流れの外側（あるいは物体内）に分布させ得るものがあり、重ね合わせの結果は、一般解として

$$\begin{aligned} \mu \mathbf{V} &= -\frac{1}{k^2} (\nabla p + \text{rot rot } \Phi) \\ &= \Phi - \frac{1}{k^2} \nabla (p + \text{div } \Phi) \end{aligned} \quad (10)$$

と与えらる。ただし p は調和関数

$$\Delta p = 0 \quad (11)$$

Ψ は ヘルムホルツ の 方程式

$$\mathcal{L}_t[\Psi] = (\Delta - k^2)\Psi \quad (12)$$

を満足するヘルムホルツ関数である。

例. 固定球 (半径 a) を過す振動流 $V_\infty (\propto e^{at})$

球面上で $V = -V_\infty$, 無限遠で 0 に近づく擾乱場は e^{at} を除く定数に

$$p = (\nabla \cdot \nabla) \phi, \quad \frac{F}{6\pi\mu a} = -E V_\infty \quad (13)$$

$$E = 1 + ka + \frac{1}{3}k^2 a^2$$

$$\Psi = -\frac{3\mu a}{2\eta} e^{k(a-r)} \quad (14)$$

で与えられる。 $-F$ は 流体が球にかよぼす力である。

E の第 3 項は F に $-2\pi\rho a^3 \dot{V}_\infty$ を与える (17 時間微分)

さらに $\frac{4\pi}{3}\rho a^3 \dot{V}_\infty$ を加えれば 静止流体中を $V_0 e^{at}$ (速度 \dot{V}_0)

振動する球に働く抵抗力 $-6\pi\mu a \tilde{E} V_\infty$, $\tilde{E} = E - \frac{2}{9}k^2 a^2$

を与える。一般に $V_\infty (e^{at})$ の流れの中を $V_0 (e^{at})$

の速度で振動する球には $6\pi\mu a E (V_\infty - V_0) + \frac{4\pi\rho a^3}{3} \dot{V}_0$

の力が働くことも容易にわかる。任意の運動についてはフーリエ合成が

よ...
ここで導いた一般解を用いると V_∞ が場所により場合によ

いて、物体に働く力を $V_\infty(x)$ あるいは $p_\infty(x)$ を用いる

あそわかる (Faxén の公式の形式) こともできる。(次の機会に別)。

§3 瞬間集中力による基本解¹⁾

時刻 $t = \tau$ における瞬間集中力 $F(\tau) \delta(t - \tau) \delta(x - x_p)$ に対する基本解 $V_c(x, t)$, $p_c(x, t)$ は

$$\nabla \cdot V_c = 0 \quad (1)$$

$$\rho \frac{\partial V_c}{\partial t} = \mu \Delta V_c - \text{grad } p_c + F(\tau) \delta(t - \tau) \delta(x - x_p) \quad (2)$$

から見つけたければ。

ラプラス変換 $f^* = \mathcal{L}[f] = \int_0^\infty e^{-\alpha t} f(t) dt$ ($\tau > 0$)
 を行えば (2.1), (2.2) で V, p のかわりに V_c^*, p_c^*
 F_p のかわりに $F(\tau) e^{-\alpha \tau}$ とおいたものが得られるので
 したがって

$$p_c^* = (F_p \cdot \nabla) \phi_p e^{-\alpha \tau} \quad (3)$$

$$\mu V_c^* = \left[-\frac{1}{k^2} (F_p \cdot \nabla) \nabla (\phi_p - \chi_p) - F_p \chi_p \right] e^{-\alpha \tau} \quad (4)$$

と書ける。 $k^2 = \rho \omega / \mu = \alpha / \nu$ ($\nu = \mu / \rho$ は動粘性係数)

ラプラス逆変換の公式 (Erdélyi³⁾ p. 245, 293)

$$\mathcal{L}^{-1}[f^*(\alpha) e^{-\alpha \tau}] = f(t - \tau) \quad t > \tau$$

$$\mathcal{L}^{-1}[\exp(-\alpha^{\frac{1}{2}} \alpha^{\frac{1}{2}})] = \frac{1}{2} \alpha^{\frac{1}{2}} \pi^{-\frac{1}{2}} t^{-\frac{3}{2}} \exp(-\frac{\alpha}{4t})$$

$$\mathcal{L}^{-1}[\alpha^{-1} \exp(-\alpha^{\frac{1}{2}} \alpha^{\frac{1}{2}})] = \text{erfc}(\frac{1}{2} \alpha^{\frac{1}{2}} t^{-\frac{1}{2}}) \quad (5)$$

$$\mathcal{L}^{-1}[K_0(\alpha^{\frac{1}{2}} \alpha^{\frac{1}{2}})] = \frac{1}{2t} \exp(-\frac{\alpha}{4t})$$

$\text{erfc}(\xi) = 1 - \text{erf}(\xi) = \frac{2}{\sqrt{\pi}} \int_{\xi}^{\infty} e^{-\xi^2} d\xi$

$$\mathcal{L}^{-1}[\alpha^{-1} K_0(\alpha^{\frac{1}{2}} \alpha^{\frac{1}{2}})] = \frac{1}{2} E(\frac{\alpha}{4t}), \quad E(\xi) = \int_{\xi}^{\infty} e^{-\xi/\xi} d\xi$$

$$FFL \quad \alpha = |\mathbf{x} - \mathbf{x}_p|^2 / \nu = R^2 / \nu^2, \quad R = |\mathbf{x} - \mathbf{x}_p|$$

を用いるのは

$$P_c = (F(\tau) \cdot \nabla) \phi_p \delta(t - \tau), \quad \phi_p = -\frac{1}{4\pi R}$$

$$\rho \mathbf{V}_c = F(\tau) [4\pi\nu(t - \tau)]^{-N/2} \exp\left[-\frac{R^2}{4\nu(t - \tau)}\right] - (F(\tau) \cdot \nabla) \nabla \bar{\Psi}_c$$

を得る。FFL N は次元数

(6)

$$\bar{\Psi}_c = \begin{cases} -\frac{1}{4\pi R} \operatorname{erf}\left(\frac{R}{2\sqrt{\nu(t - \tau)}}\right), & N = 3 \\ \frac{1}{4\pi} \left[E\left(\frac{R^2}{4\nu(t - \tau)}\right) + 2 \log R \right], & N = 2 \end{cases} \quad (7)$$

である。

2次元の流束 ζ は複素量 $\zeta = x + iy, \bar{\zeta} = x - iy,$

$\zeta = F_x + iF_y, \bar{\zeta} = \zeta - \zeta_p(\tau)$ を導入する。ことによ

り複素速度 $w = v_x - i v_y$ を用いるのが便利である。(6), (7)

から $2\pi \rho w_c$ に対して

$$2\pi \rho w_c = \frac{\zeta}{\zeta^2} + \left\{ -\frac{\zeta}{\zeta^2} + \frac{\bar{\zeta}}{4\nu(t - \tau)} \left(1 - \frac{\bar{\zeta}}{\zeta}\right) \right\} \exp\left[-\frac{\zeta \bar{\zeta}}{4\nu(t - \tau)}\right]$$

が導かれる。

(8)

§4 移動する非定常集中力による場

時刻 t に $\mathbf{x}_p(t)$ にあり $F(t)$ の強さをもつ非定常集中力

$F(t) \delta(\mathbf{x} - \mathbf{x}_p(t))$ の生じる場は §3 の $F(\tau) \delta(\mathbf{x} - \mathbf{x}_p(\tau))$

$\delta(t - \tau)$ による場 \mathbf{V}_c, P_c がある。これは w_c を物体が静止して、

無限の過去から現在の時刻 $t = t$ まで τ について積分

がわが求まる。ただし x_p は $x_p(t)$ であることを留意する。
 したがって

$$pV = \int_{-\infty}^t pV_c d\tau, \quad p = \int_{-\infty}^t p_c d\tau = (F(t) \cdot \nabla) \phi_p, \quad 2\pi p\omega = \int_{-\infty}^t 2\pi p_c \omega_c d\tau$$

ただし $\phi_p = -1/(4\pi |x - x_p(t)|)$. (1)

したがって、圧力はその瞬間の源の位置と位置によつて定まるものがあり、(2.1), (2.2) に相当して

$$\Delta p = F(t) \delta(x - x_p(t)) \quad (2)$$

から直接導くこともできる。

物体の速度が x 軸の負の方向の一定値 v ($x_p = -vt$) に、 F が一定値 F に漸近する。これは原点を $x_p(t)$ に移し、極限をとることによつて

$$p\omega V = \frac{F}{4\pi R} e^{-\kappa(2-x)} + \frac{1}{4\pi} (F \cdot \nabla) \nabla [\log(2-x) - E(\kappa(2-x))]$$

$$4\pi p\omega V = -\frac{F}{2} + \kappa e^{\kappa x} [F K_0(\kappa x) + F K_1(\kappa x) \frac{x}{e}] \quad (3)$$

$\kappa = v/(2v)$ がえられる。これは x 方向に一定の定常流 v があるときの原点にかかれた定常集中力に対するオセーニの方程式 (ナビエ-ストークス方程式の慣性項を $v \partial/\partial x$ で置きかえたもの) の基本解に他ならない。このように非定常ストークス方程式がオセーニの方程式を特別に扱ふことは、ガリレイ変換によつて示すことも可能である。

文 献

- 1) Hasimoto, H: Theor. and Appl. Mech. (Tokyo Univ. Press)
22 (1972) 287.
- 2) Lamb, H: Hydrodynamics (Cambridge at the Univ.
press, 6th ed. 1932),
- 3) Erdelyi, A: et al: Tables of Integral Transforms I. (Mc
Graw-Hill, 1954).
- 4) 今井 功: 流体力学 前編 (裳華房, 1973).